R5 年 11 月 新聞記事（山陰中央新報）

令和 5 年 11 月 19 日（日）付　山陰中央新報

子ども目線で考える

ウクライナとロシア あすから絵画展

松江

「ウクライナとロシアの子ども絵画展」が20日、松江市殿町の島根県民会館プロムナードギャラリーで始まる。ロシアによるウクライナ侵攻で、戦禍を被る両国の子どもたちの暮らしについて考える。26日まで。

両国内の子どもの絵画を計80点展示する。島根県立大人間文化学部の学生有志が、大人がつくり出した悲惨な戦争下でも、子どもたちが各地で生活を続け、未来に期待しながら成長していることを伝えようと企画。アジアでも紛争が起きていることを踏まえ、ミャンマーの子どもが描いた作品7点も紹介する。

無料。23日午後2～3時、写真家の高嶋敏展さんが島根県内に残る戦争の痕跡について語るほか、関連の写真も展示する。問い合わせは島根県立大人間文化学部の福井一尊教授、メールk-fukui@u-shimane.ac.jp

ウクライナとロシアの子ども絵画展のチラシ

令和５年１１月２３日（木）付　山陰中央新報

戦禍考える子ども絵画

ウクライナ、ロシア 日常描いた80点

松江で展示会

戦闘が続くウクライナとロシアの子どもが描いた絵画展が、松江市殿町の島根県民会館1階のプロムナードギャラリーで開かれている。島根県立大人間文化学部の学生が主催し、戦下で忘れられがちな子どもたちの日常について考えるきっかけをつくる。26日まで。無料。

ポスターを持って来場を呼びかける島根県立大人間文化学部の学生＝松江市殿町、島根県民会館

同学部保育教育学科美術教育学研究室（福井一尊教授）の3、4年生7人が、ロシアによるウクライナ侵攻前に描かれた両国の絵を美育文化協会から取り寄せた。

4～15歳の作品計80点は「絵に国境はない」とのメッセージを込めて国ごとに分けず一緒に並べる。家族と食卓を囲む様子や雪景色など、何げない日々の一場面を表現する。

4年生の津川侑大（ゆうと）さん(22)は、両国の子どもと年齢が近い児童生徒や親、教育関係者など幅広い層の鑑賞を希望し「遠い国のイメージがあるが、子どもの遊びや活動は日本と変わらない。子どもたちの日常生活に目を向けてもらいたい」と呼びかけた。

25、26の両日には研究室の学生と来場者が絵の感想を共有する対話型鑑賞会を開く。（小引久実）

令和５年１１月30日（木）付　山陰中央新報

運動好きな子増やしたい

島根県立大 指導者の養成開始

全国的に児童生徒の体力低下が課題となる中、島根県立大松江キャンパス（松江市浜乃木７丁目）が、10歳以下の子どもたちに体を動かす楽しさを伝える「キッズリーダー」の養成を始めた。教育の道を志す学生たちに資格取得を促し、運動好きの子どもたちを増やす。

キッズリーダーは日本サッカー協会の公認指導者。実技と講義をそれぞれ１時間半受講すると取得でき、協会や自治体が行う子ども対象のスポーツイベントに参加できる。

プロの女子チームでコーチ経験があり、同キャンパスに本年度着任した中谷昌弘准教授（生涯スポーツ）が協会と連携し、初めて実施した。

29日は取得を希望する学生43人が実技を受講。新聞紙を丸めたボールを使ったサッカーを通じて体を動かす大切さや、知らない人と会話する楽しさを学び、全員が資格を取得した。

小学校教員を目指す保育教育学科１年の岡本未菜さん(19)は「仲間と楽しめるスポーツの良さを広めたい」と話し、中谷准教授は「体を動かすのが好きな子どもを増やし、地域貢献したい」と望んだ。

小学５年と中学２年を対象にした２０２２年度全国体力テストで、島根の小、中学生は男女ともに合計点は全国平均を上回ったものの、点数はいずれも前年より下がっている。

（清山遼太）

サッカーゲームの実技講座を受ける学生たち＝松江市浜乃木７丁目、島根県立大松江キャンパス